

續近世畸人傳

五

滋賀縣尋常	中學校藏書	部類	雜	記号	冊數

厂七五

281
48
Vol 5止

續近世時人傳卷之五

英一蝶

滋賀縣立中
學校藏書印

此ハ多賀待野安伝ノ送書ト申シキハ待野信吉
 名号ガ没年ノ母ト申シキハ多賀長海ト云フコトナ
 又英一蝶ト云フ花類ハ其母ノ名ト云キタムコトナ
 此ハ流されてキトシシ後ハ有柳竹花小蝶乃チ其母ト云
 コトナリキ其母ノ名ナリシコトナリ英一蝶ト云フコトナ
 類ト云フ成帝極ノ名ト云キ性膽骨チ物モ母ノ性ト云
 者ナリ一旦及アリキ遠處ニ流ラレタリキ画ト云フ
 賜リテ衣食ノ料ニ充テ給フアリシコトナリ其画ニ
 ナリキ其母ノ名ト云フ石流流と云フコトナリ
 其コトナリ其母ノ名ト云フ其母ノ名ト云フ
 其母ノ名ト云フ其母ノ名ト云フ其母ノ名ト云フ
 其母ノ名ト云フ其母ノ名ト云フ其母ノ名ト云フ

齊も我のちひんを韓山一所石を移すの事申す
侍人といはれり西宮の一年入なりが去年の夏深泉
たり岡田子梅韓山を碑北越人温子昇作之廣信云韓山一所石
唯可共法而之と作聖場大丈此結よりいり

○家考永田氏名忠る字信年一号ふ早。又黎祁
道くといふ豆腐と嗜ひし事しされ之黎祁の事
一寺解の極清の菓信年と名し信年蓋あれし
去厨帝と仰うしる可もされと事しと事し
恐らざるなり或きまなり一厨部を減んと事し
西を事すつと事しはつと事しと事し
と。顔とららなり。事しと事しと事しと事し
かやちあつと事しと事しと事しと事し
とく事しと事しと事しと事しと事しと事し

久しと事しと事しと事しと事し

君為入冲黙謙虚。口不言財利。不概否人物有温厚
長者之風。少善書。學李北海。雲塵岳麓。二帖其最所
注意。晚年名聞于海内。門人以千數。平生自奉甚儉。
不貯長物。性嗜豆腐。輒血絕口。信觀音。嘗神手寫金
剛孝經。朝夕誦以祭之。天稟虛弱。善病。寛政壬子秋
冒暑得疾。遂不起。卒。日猶寫數字。書辭世詩。閣筆而
逝。末句曰。孝經一卷在。受用傳。紀孫余。締交三十年。終
始如一。余不能書。每一詩成。倩君寫之。他有請者。雖
奴僕欣然。書與之。畧無沮色。以余視之。近世平安第
一等人物也。昔者王履吉。温醇恬曠。與物無競。人擬
之。黃叔度。君其庶幾乎。惜夫。年命不永。享年才五十



こゝろのちかへる人ありてさねよしもさうれてこゝろ
 つた圃のふれさうぶし。きつて丸九條相國道序か
 としとまへて月々もあつた。やうびにそと園名のく
 ち流のささきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 うらなふとてあはれなふとてあはれなふとてあはれなふ
 とあはれなふとてあはれなふとてあはれなふとてあはれなふ
是實永十七年

こゝろのちかへる人ありてさねよしもさうれてこゝろ
 つた圃のふれさうぶし。きつて丸九條相國道序か
 としとまへて月々もあつた。やうびにそと園名のく
 ち流のささきさきさきさきさきさきさきさきさきさき
 うらなふとてあはれなふとてあはれなふとてあはれなふ
 とあはれなふとてあはれなふとてあはれなふとてあはれなふ

葛溪楼の所殿うれらひのばさしと長きとせし
 のちの夜に。やみよなよあせんの命ありし。おの。再
 江乃志と断つ隠探と今一はふとつり。おの。再

乃者ふふ業のさうぶに米法をもたぬ。これが家さじ
くみあつていふもかゝせむ。債つひとてふものよる時。此
ぶらけ療は貧家のさうぶにあとせむ。かゝる人の病
と愈なすていふもいふ。まゝといふ待てし。何の今もいふ
とんあつていふもいふ。凡ねくこのふいひはさうぶあつて
尾張侯乃碑は愈なすていふ病を愈し。金法教多賜りも
まじ。やういふにれとせむ。

みな名護屋侯の御病氣醫療しよりよ建平
金法教多賜りも頂戴し。古情の面々
出いをいふもいふ。まゝといふ待てし。何の今もいふ

と記しける。いふ花敷う玉田よ云。寺安乃墓大証天
玉田寺西くらまの坂太平禅ちふあり。まゝ業内の人

よりいふにらむとわたり。碑碣よあつていふもいふ乃不
動の石像。たふよ金加羅之伊多加の腕士をも具と。
此の石とていふもいふ。石の腕は小魏こゑとあり。そ不動の替ふ證と云。
等身石像。爾なほ生前是維。吾が死後是爾。截断
死し和生。爾吾實也耳。北山友松子茲題

此像乃背の火を月よ吹とるるごとくさうぶ。まゝ月風の
不動といふもいふ。寺安乃墓さうぶもいふ。後の人
まよふと。いふもいふ。幾田道八なん顔輝が筆の達磨禅師の
像小形と。昔いふといふ今いふは八とあり。市自像小形
られいふもいふ。そ氣象さうぶと

卷尾白遊子

此人を編乃事う評ふ。そ人言まよりの也。白隠禅師之

況と云んがたうん。何ふみくとまきけらわもあぐり〜
類〜が。はふ相州金沢の傍若森若森字、極狭四方に水は
待とまきけらわもあぐり詩集定遊草と書津弁芭樓示さる。
その中ふ詩白幽子詩二首あり

秋具振吾河白水 嵐光踏破訪幽踪
山村離外一枝菊 石徑再邊十里松
洞戸不厭遊客扣 岩扃只有懶雲封
遠來五回山居好 冷露未晞鳴竹蛩

又

羨着幾時隱清曉 獨倚石屏借晚曦
一徑莓苔餘兔跡 半肩薪棘對仙基
市裏日月本非別 洞裏景光猶似違

除却山中松柏翠

秋風搖落更無私

後又白幽子自序乃他之を或人乃為さると。借出〜
見えわ〜の。そまに〜してた〜掲ぐ。そ高類も〜はし

謹志箴

白幽子

夫長於雲壑青松下
無有游觀廣覽之知
顧有至愚孤陋之累
晏然哀吾生之須臾

平日好讀書不求甚
 解窺聖賢之道不慕
 榮利安貧不蔽風日
 一褐一瓢屢空不憂
 今日而俟天命而已

又予慕之同之採得之。真の書の如き。其の
 一。予の。青石に刻す

表 松風窟白幽子之墓

横 白川山居隱士

特 寶永六己丑初秋二十五日

のれいそく人乃實有の後なり。并苞さるるがみ。其のふりて
 手とて切あも。ありし。さうふれり。さうさ。白隠和尚の
 行より。庚寅四月を。さうふ編よ。奉る。が。墓
 獨いふ年己丑。さうさ。の日に。建し。さうさ。り
 くれ。二。より。さうさ。の。そ。段。日。さうさ。り。あり。
 年。是。隱士の。名。と。り。さうさ。は。山。乃。師。く。さうさ。二。百。年。ま
 も。さうさ。ん。を。さうさ。の。さうさ。れ。さうさ。其。系。記。を。と
 林。ふ。で。さうさ。ん。う。さうさ。の。老。後。や。一。日。の。空。記
 深。の。り。ふ。深。し。さうさ。ん。は。難。を。し。於。て。

馬ふ及ん人ぐらふを...
中へおる心へ一載安道南都賦を思
ふ古時乃冠肢宮堂山川乃風然に
つく正しく園下へは花堂之く
て画よ是ありておる情りけは画
重なりては唯これなり画なり
し物ぶを思ふを思ふなり
を思ふを思ふ人へ思ふなり

天明八戌申夏四月日

花顛三態思孝



畸人傳拾遺

嗣生

寛政二年庚戌秋八月 菱屋孫兵衛

林 伊兵衛

長村太助

栗本喜兵衛

野田儀兵衛

平安書林

鷓鴣想四郎



